

## 【グループディスカッション】

## 「機械翻訳・通訳機を使った授業案」

池田 真生子 先生（関西大学外国語学部教授）

山田先生のご講演の後は、関西大学外国語教育学研究科の池田真生子教授にファシリテートいただき、実際に機械翻訳を使った授業案を考えるグループディスカッションを行いました。池田真生子先生は、英語教育方法論や教材論のエキスパートで、学部及び大学院で英語教員養成科目において教鞭を執っていらっしゃいます。

今回の研究大会は、「機械翻訳という”ホット”なテーマであったからか、新米教師にベテラン教師、校種も中学校、高校、大学、専門学校と幅広く、教えている言語も英語、日本語、中国語等と多種多様でした。さらには、教育関係者のみならず実務翻訳に携わる方もいらして、バラエティーに富んだ方々に参加いただきました。

ディスカッションでは自分の近くに座っている人とグループを組むよう指示があったため、自己紹介をして初めてメンバーの背景を知るという状況でした。しかし、普段接することのない領域や分野の方々とグループを組んだことにより、それぞれが直面している課題や取り組んでいること、目標としていることを共有することができ、「言語教育」というものを広く捉えることができたように思います。

ディスカッションに与えられた時間は20分と限りがありましたが、どのグループの議論も非常に白熱し、次々と興味深いアイデアが出ていました。中でも、山田先生がご講演の中で提案くださった、『Pre-edit + MT』としての役割と『MT + Post-edit』としての役割に、ヒントを得たものが多かったように感じました。

第2部のまとめとしてグループ毎にディスカッションの成果を発表し、その内容を池田先生が、1) アウトプット、2) チェック、3) 気づきの三つのキーワードに集約してくださいました。このことから、現時点で言語教育の現場で機械翻訳を使う利点として挙げられるのは、以下の点だと言えるかもしれません。

- ・学習者がアウトプットを試みる際、言いたいこと（L1で）を、自分の力で翻訳可能なレベルにまで落として再構築する（Pre-edit）練習を行うことにより、脳内で自分が学習している対象言語のレベルをも意図的に操作することができるようになること（アウトプットの補助練習）
- ・対象言語で書いた作文を機械翻訳にかけてみることによって、学習者自身で作文をチェックできること
- ・音声読み上げ機能があることから、スピーチ練習に利用することが可能であること

参加した教員の方々からは、「現場で仕事に追われているとなかなか踏み込めない、教科指導の理論的な部分について深く考えるきっかけになった」「自分とは違う背景を持った言語教育者の方々と話ができて、有意義だった」「ご講演やディスカッションから刺激を受け、もっと勉強しようと思った」「これを機に、自分の授業にも機械翻訳を取り入れてみようと思う」などといった感想をお聞きすることができました。

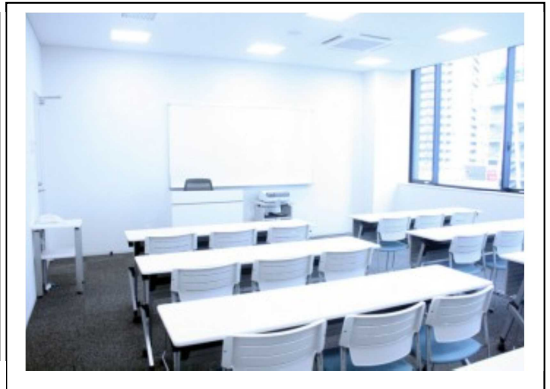
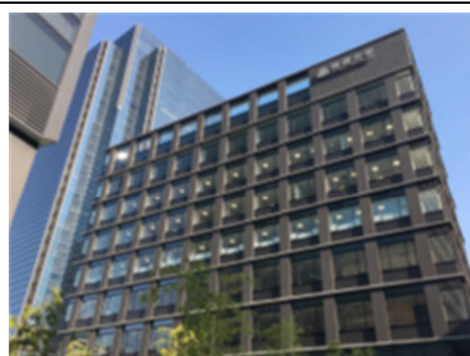
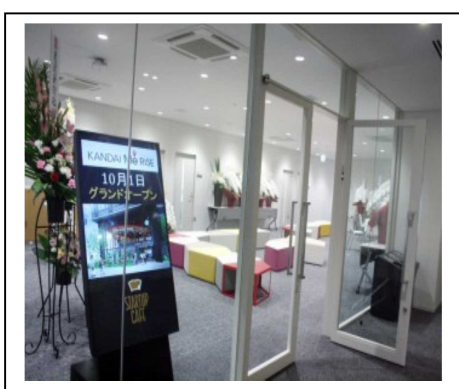
様々な立場の参加者にとって大変有意義な場になったと思います。ありがとうございました。

（文責：森岡千廣）

【共催イベント】

「外国につながる子どもを元気にするための実態調査報告会」

主催：NPO法人 おおさか子ども多文化センター



＜梅田キャンパス KANDAI Me RISE＞

2019年3月24日、関西大学梅田キャンパス KANDAI Me RISE で 外教学会初の試みである他機関との共催イベント「外国につながる子どもを元気にするための実態調査報告会」を開催しました。

主催の NPO 法人おおさか子ども多文化センター（通称、OkotaC）については、NewsletterVol.12 でも紹介しましたが、長年、大阪府に住む外国につながる子どもたち、つまり、文化的・言語的に多様な背景を持つ子ども達（Culturally Linguistically Diverse Children）（CLD 児）の教育支援をしている団体です。「複言語主義と外国語教育—今、求められる複言語主義とは何か？」をテーマとした第12回外教学会研究大会で、OkotaC が行っている「えほんのひろば」活動について紹介させていただいた際に、吉田会長、神道幹事長をはじめ、学会役員から今後何らかの形で協力できたらという前向きな言葉をいただき、今回の報告会の共同開催という運びになりました。

OECD 発表の統計（2015年）によると、日本は既にドイツ、アメリカ、イギリスに次ぐ世界第4位の移民流入国で、2010、11年の7位から2012～14年には5位、そして、2015年には4位と徐々に上昇し、その数は5年間で約12万人増えました。しかるに、各国で移民の子どもへの教育に対する様々な支援体制が整えられるなか、日本では残念ながら公的な実態調査すらなされていません。そのような現状において、今回、大阪の府立高等学校（特別枠校）に在籍する外国につながる子ども達を対象に、OkotaC と大阪大学の研究チームが実施したインタビュー及び約100人に対するアンケートによる実態調査結果の報告会を実施できたことは、意義あることだと思います。当初参加定員を50名としていましたが、最終的には70名を超える方が足を運んでくださり、関心の高さを改めて感じました。

ともすると、高等学校では義務教育課程と比べると手厚い支援が受けられない傾向にあることが、過去に様々な形で報告・報道されています。それに加え、文部科学省が実施した高校中退率の調査で、2016年度の全国の公立高校生の中退率が1.27%であったのに対し、日本語教育が必要な公立高校生の9.61%が前年度に中退していたという結果発表があったことから、今回の調査対象者もさぞ苦勞しているのだろうと思って報告を聞いていました。ところが、豈図らんや、調査では高校生活が楽しいという声が多く聞かれたという結果を聞き、正直、驚きました。

では、高校生活を楽しいものにする要因は何か。それは友人関係といえるようです。パネルディスカッションで登壇した当事者の皆さんが、いい友だちに恵まれたから頑張れたと口々に言っていたことが、印象に残りました。

この報告会に参加するまで、公的な教育支援体制を充実させることが、何より重要だと考えていましたが、当事者の皆さんの話を聞いて、それ以上に若い世代のEQ（emotional quotient）や共感力を高めることの重要性に気づくことができました。

最後になりましたが、この報告会開催にあたり、吉田会長に一方ならぬお力添えを賜りました。ここに改めてお礼申し上げます。

（文責：戒 妙子）